

特別講演 1

「脳卒中データバンクの成果と次世代脳ドック構想」

島根大学医学部 特任教授

小林 祥泰 先生

脳卒中データバンクは 1999～2001 年の厚労科研班研究で作成したが PC を用いた詳細かつ大規模な病院基盤のデータベース構築は当時としては画期的であった。2003、2005、2009、2015 年に脳卒中データブックとして発刊した。脳卒中病型別頻度は動脈-動脈塞栓まで分類した世界一精度の高いもので、経年変化で虚血性ではラクナ梗塞、アテローム血栓性梗塞比率の減少と心原性脳塞栓増加、出血性ではくも膜下出血比率低下が明らかとなった。高齢社会となったこと、加齢と共に心房細動が増加していること、未破裂脳動脈瘤手術が普及したことが関与していると思われた。3 時間以内入院脳梗塞例の t-PA 治療率は 2006 年以後 17%程度であった。救急隊で評価する病院前脳卒中救護データベースは診断率を高め搬送時間が短縮した。予防面では島根難病研究所で始めた日本初の MRI による脳ドックの追跡調査で無症候性脳梗塞、微小脳出血が脳卒中のハイリスクであり認知機能低下にも関与することを報告した。今後は軽度認知機能低下を検出する簡便な iPad を用いたスクリーニング検査 [CADI] の普及、クラウドシステムを用いた安静時 fMRI による脳ネットワーク機能評価を加味した次世代脳ドックの普及を図るべく準備中である。